



千葉県立中央博物館 令和7年度 秋の展示

水辺の昆虫

● 展示づくりの裏側 1	秋の展示「水辺の昆虫」の舞台裏	2
● 展示づくりの裏側 2	利根川の高瀬船、その姿と生活	3
● 研究員のしごと	資料収集・調査・展示 一日本民俗学の父・柳田國男にかかわる資料をめぐって一	4
● 博物館資料の紹介 1	シギ・チドリ類の剥製標本	6
● 博物館資料の紹介 2	紅葉したモミジの標本	7
● フィールドミュージアム事業の紹介	清和小学校教室博物館	8

展示づくりの裏側 1

秋の展示「水辺の昆虫」の舞台裏

地域連携課 樽 宗一郎

秋の昆虫と聞いて何を思い浮かべますか？

まず思い浮かぶのが、コオロギなどの“鳴く虫”かもしれません。アキアカネに代表される赤蜻蛉^{とんぼ}は、秋の季語にもなっています。実は、秋に成虫が発生する昆虫は多く、水の中で生活することで知られるゲンゴロウも秋に新成虫が姿を現します。

そんな秋にあわせて、当館では10月18日から秋の展示「水辺の昆虫」を開催します。田んぼや川、池、海岸などに生息する様々な昆虫を、標本や生体展示を通して紹介します。

展示の詳細は、ぜひ実際に会場でご覧いただくとして、今回はその展示をつくる前に欠かせない準備作業についてご紹介したいと思います。それが、「標本が整理されていること」です（図1）。博物館の基本的な活動には、「資料の収集と保管」「調査研究」「展示と教育普及」という三本柱がありますが、その基盤となるのが「資料の収集と保管」、すなわち標本整理です。

展示は、あるテーマに沿って構成されます。そのテーマに関連する資料が博物館にどれだけあるか、どのような内容を把握していなければ、展示計画を具体化することはできません。今回の展示の対象は「水辺に生息する昆虫」。ゲンゴロウやタガメ、トンボのようなメジャーなグループのほか、ヘビトンボ、カワゲラ、トビケラなど、少しマイナーなグループも含まれます。それらに該当する標本をどのくらい収蔵しているのか、正確に把握することが重要です。

当館の昆虫コレクションは約20万点にのぼります。これらは今まで当館職員が採集してきた標本はもちろんのこ

と、様々な方にいただいた標本も多く含まれます。こうした標本の整理作業には、20名を超えるボランティアや市民研究員の皆さんの力を日々お借りしています。整理が進めば進むほど、展示や研究の幅も広がっていきます。

実は、今回の展示も当初は「湿地に生息する昆虫」を中心にすることも検討されていました。湿地（ぬかるんだ地面のあるような場所）では、ゴミムシの仲間などが代表的な昆虫です。当館にはそれらの標本もありましたが、生態写真が不足していたため、職員は県内各地に撮影に出かけることになりました。水辺という広い概念の中に湿地も含まれるため、撮影した写真は今回の展示で紹介します。

このように、展示の裏側には地道で息の長い準備があり、それを支えているのが標本整理です。展示室に並ぶ美しい標本。その一つ一つが、見えないところで多くの人の手と時間によって支えられています。展示をご覧になる際には、そんな博物館の“舞台裏”にも、ぜひ思いを巡らせていただければ嬉しく思います。



図1 種ごとに整理されたゲンゴロウの標本箱

展示づくりの裏側 2

利根川の高瀬船、その姿と生活

資料管理課 奈良場 春輝

国内最大級の川船

令和7年6月初旬、トピックス展「利根川の高瀬船」（会期：同年10月11日（土）～12月7日（日）、於：中央博物館第2企画展示室）に向けて、先輩研究員とともに大利根分館にて資料調査を行いました。展示室に入るや否や、目に飛び込んでくるのは高さ2メートルを超える舵かじです（図1）。この一つを見ても全長20メートルを超えたという利根川の高瀬船の大きさに圧倒されます。北関東一円と江戸、銚子を結んだこの船は国内最大級の川船として、利根川水運を支える重要な役割を担っていました。『和漢船用集』にも「上州（注：上野国、おおよそ現在の群馬県）の高瀬舟、長十四五尋ひろ、幅一丈二三尺、高瀬舟是より大なる者なし」と記されています。

本展では、高瀬船建造の経験がある最後の船大工が造った「利根川高瀬船 1/5模型」をはじめ、帆や滑車といった船体部材を展示します。模型と部材を見比べながら、それぞれの部材が船体のどこに配置され、いかに機能していたのかを探ることで、高瀬船の壮大さと、それを造り動かした人々の知恵を感じていただけるでしょう。



図1 高瀬船の舵（中央博物館大利根分館にて撮影）

船頭たちの暮らし

船頭たちは航行の途中では陸にあがらず、船上で寝泊まりすることが多かったようです。船の前方にはセイジ（世事、炊事）という部屋があり、いろりや船筆ふなだんす筥、神棚といった船上生活を送るための設備がコンパクトに収まっていた。葛飾北斎『富嶽三十六景 常州牛堀（注：常陸国牛堀、現在の茨城県潮来市）』には、男がセイジの屋根板を外して身を出し、羽釜から米の研ぎ汁を捨てる様子が描かれています（図2）。これらの資料からは限られた空間での工夫、船頭たちが送った生活をうかがい知ることができます。

船体部材や船上用具をご覧ください、高瀬船が行き交う利根川の風景に思いを馳せていただけますと幸いです。

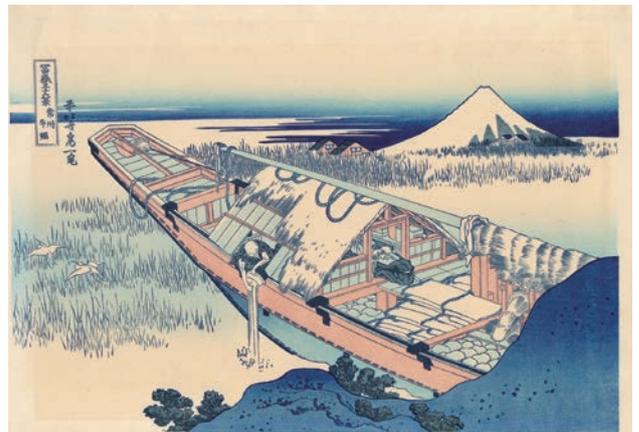


図2 葛飾北斎 富嶽三十六景 常州牛堀（複製）
（中央博物館大利根分館蔵）

研究員のしごと

資料収集・調査・展示

—日本民俗学の父・柳田國男にかかわる資料をめぐって—

展示課 玉井 里奈

日本民俗学の基礎を築いた柳田國男（1875～1962）。河童や座敷わらしが登場する、岩手県遠野地方の民話や伝説を記した『遠野物語』の著者としてご存じの方もいらっしゃるでしょう。生業や衣食住、人生の節目の儀礼、年中行事、信仰、芸能などを調査し、人々の間で受け継がれてきた生活技術や知識、家同士の繋がりの移りかわりを明らかにするのが民俗学です。そのための研究手法を編み出し実践したのが柳田國男であり、今年生誕から150年を迎えます。当館ではその節目の年を前に多くの柳田関係資料を受け入れることになり、それらをトピックス展「民俗学の父・柳田國男一本から読み解く暮らしへのまなざし」（令和7年4月12日～6月15日）でお披露目しました。資料の内容と、展示に至るまでの過程をご紹介します。

柳田國男著書のコレクション、寄贈される

まずは令和5年（2023）に収蔵した柳田國男著書のコレクションです。これらは平野亥一きいつ氏が柳田の著書のうち初版にこだわって集めてきたもので、関係書籍含め193点にのぼります。平野氏のご子息から当館へ寄贈のご相談があり資料の内容や状態の調査を行ったところ、保存状態も良好、編著書だけでなく序文を手がけた本まで幅広く集められ、発行部数の少ないものも含まれていることが分かりました。柳田國男は利根川に面した茨城県ふかわの布川で幼少期を過ごしたほか、講演などでたびたび千葉県を訪れるなど、本県にゆかりある人物でもあります。また、改訂版出版にあたり内容が大きく加筆修正されたも

のもあるため、初版と改訂版を読み比べることで彼の思索の変化などを確かめることができます。これらを踏まえて当館でコレクションをお引き受けすることとなりました。寄贈手続きが終わると、資料は番号が振られて博物館資料として登録され、資料に悪影響を及ぼす虫やカビを殺す燻蒸くんじょうを経て収蔵庫に納められました。……と、ここまでは先輩研究員が行った仕事です。

令和7年（2025）が柳田國男生誕150年にあたること、また新収蔵資料のお披露目の機会を作るため、この年の展示を企画し私が主担当として進めていくことになりました。当初、展示資料はこの柳田著作コレクションのみで、あとは柳田やその研究を解説するパネルを掲示する予定でいました。それが思わぬ展開を迎えることとなります。

柳田國男直筆の原稿、見つかる

昨年8月、展示に向けて準備を進めているさなか、「県立中央図書館に柳田に関する資料がある」という情報が入りました。「図書館に資料があるらしい」という話を聞いていたため、どのような資料があるか問い合わせていたのです。閲覧に伺ったところ、どうやら柳田國男直筆の原稿などや、柳田宛の手紙であることが分かりました。原稿の入った封筒に書かれた標題をメモし、点数をかぞえて1点ごとに写真を撮影。館に戻って資料リストを作りつつ、標題からなんの原稿なのかを調べました。すると封筒のうち2点は昭和26年（1951）に刊行された柳田著おしらがみこう『大白神考』の原稿であることが分かりました。

刊行された書籍と原稿を比べてもほぼ内容が一致しています。



図1 『大白神考』序文の原稿（当館蔵）

続いて「婚一 嫁入りの起り」などと書かれたシールの貼られた封筒31点。中には結婚に関する言葉とその意味、使用地域が書かれたメモが入っていました。結婚関係の柳田の著作をあたり、大間知おおまち篤三とくぞうとの共著『婚姻習俗語彙』の章立てと封筒の標題が一致することが分かりました。執筆時に作成したメモと考えられます。

あとはこれが本当に柳田直筆のものであるかの確認です（これらの資料はこれまで詳しく調査されてこなかったこともあり「本当に柳田の書いたものなのか？」と当惑していました）。成城大学民俗学研究所には柳田が書いた原稿やハガキが所蔵され、一部はデジタルアーカイブ公開されています。これと照らし合わせ、封筒に貼られたシールや用紙の使い方、筆跡などの特徴が一致することなどから本人のもので間違いなし、と決定づけました。特に『大白神考』は刊行までに序文の一部が差し替えられており、差し替え後の原稿は同研究所が所蔵しています。これと比較したところ中央図書館にあったものが差し替え前の原稿であることが分かりました。ほかにも民俗学者の佐々木喜善きぜんと、ロシア出身の言語学者・民俗学者であるニコライ・ネフスキーが柳田へ出し

た手紙やメモなども見つかりました。これらは佐々木とネフスキーが共同研究していた東北地方の家々でまつられる「オシラサマ」に関するもので、筆跡や文面から本人たちのものといえます。手続きを経てこれら38点は中央博物館所蔵資料として受け入れることとなりました。思いがけず見つかったこれらの資料も展示するため展示レイアウトを再考(ケース二つ増えました!)。ほかの研究員の協力を得てなんとか展示開催にこぎつけました。X(@chiba_chuohaku)の展示告知がプチバズったこともあり?会期中は柳田や民俗学に関心を持つ方にもご来場頂けたようです。資料解説も文字びっしりの展示でしたが熱心にご覧になっている方も多く、この節目の年に改めて柳田國男の足跡を知って頂く機会になったように思います。展示に際しご協力・ご来場頂いた皆様にごの場を借りて改めて御礼申し上げます。

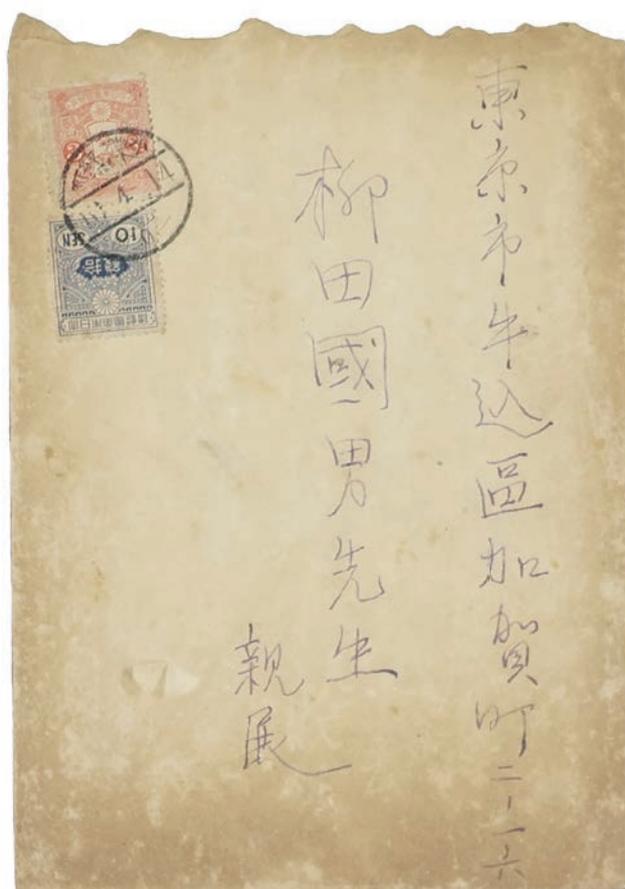


図2 ネフスキーから柳田宛の封筒、便箋は同封されていなかった（当館蔵）

博物館資料の紹介①

シギ・チドリ類の剥製標本

展示課 小田谷 嘉弥

シギ・チドリってどんな鳥？

渡り鳥と呼ばれる鳥のなかには、ツバメのように夏に日本で繁殖して南に渡るもの、ツグミのように冬に日本に渡ってくるものなど、様々な渡りの経路があります。今回ご紹介するシギやチドリの仲間の多くは、日本では繁殖も越冬もしないけれど、渡りの時期に通過していく旅鳥と呼ばれる鳥たちです。彼らは浅い水辺を歩いて小動物などを食べる水鳥で、日本では80種が記録されています。このうち、中央博物館では34種の剥製標本を収蔵しています。

オオソリハシシギのすごい渡り

千葉県内の砂浜や干潟にも渡来するオオソリハシシギ（写真1）は、長く反った嘴を干潟や砂浜に差し込んで、ゴカイなどの小動物を捕えます。アラスカの湿地で夏に繁殖し、子育てが終わると渡りのための脂肪を蓄え、体重を2倍ほどに増やします。準備が整うと、越冬地のニュージーランドに向けての渡りを開始します。この際に、一度も休憩せずに、10日間ほどかけて1万km以上を飛び続けて越冬地まで一気に渡ることが、発信器を用いた追跡によって確かめられています。この移動は、渡り鳥が一度に飛ぶ距離のうち、最も長距離であることが知られています。南半球での越冬期が終わると、今度は北上して繁殖地に戻る春の渡りが始まります。この移動経路は秋と異なっており、まっすぐ繁殖地に向かわずに、一度北西に飛んで日本などの東アジアの中継地に向かいます。ここで1か月ほどを過ごして栄養補給を行った後、再び北東に進路を取り直し、繁殖地のアラスカに戻ります。このような、繁殖地、越冬地、春の中継地の3か所をめぐる渡りのルートくちばしの長さは、1周およそ3万kmにも達します。これを毎年繰り返すのですから、渡り鳥の能力には驚かされます。

減っているシギ・チドリと博物館収蔵資料の役割

驚異的な渡りの能力を持つシギ・チドリですが、多くの種類で個体数が減少しており、絶滅危惧種に指定されています。その割合は非常に高く、日本産の80種のうち、16種が国際的なレッドリストで絶滅の危機がある絶滅危惧種、15種が準絶滅危惧種に指定されており、これらを合わせると38%にもなります。個体数の減少要因は種によって異なりますが、生息地の破壊やその質の劣化が主な原因と考えられています。

博物館の資料は、この時代に生きていたシギ・チドリ類の実物を未来に残すためにとても重要なものです。実物が残っていることで、羽毛やDNAなどを用いた様々な研究に活用できる可能性を秘めています。研究で得られた知見は、シギ・チドリの数がこれ以上減らないように保全するため対策にも役立つでしょう。中央博物館では、今後も鳥類の資料の収集を継続していきます。野外で死亡した鳥類の遺体資料を発見された方は、ぜひ鳥類担当までご相談ください。



写真1 オオソリハシシギ（チドリ目シギ科）雄成鳥
千葉県習志野市産の標本
標本番号CBMZB-02378

博物館資料の紹介②

紅葉したモミジの標本

資料管理課 水野 大樹

秋にちなんだ資料ということで、「モミジ（カエデ）」の仲間を紹介したいと思います。

一般にモミジやカエデと呼ばれるのは、ムクロジ科カエデ属に属する植物のうち、葉が分裂しているものを指します。モミジの特徴は何といても、秋になると葉がきれいに色づくことです。葉には緑と黄の色素が含まれていて、緑の色素量の方が多いため、通常葉は緑色をしています。しかし、気温が下がり緑の色素が破壊されると、相対的に黄色の色素が多くなるため葉は黄色になります。葉が赤くなる場合は、緑の色素の破壊と並行して、もともと無かった赤い色素が別に作られることが影響しています。赤の色素は光合成でできた糖をもとに作られます。通常は、糖は葉に貯まることはないのですが、気温が下がると葉の付け根に離層と呼ばれるバリアが生成され、糖の行き場が失われます。そのため葉に貯まった糖から赤い色素がたくさん作られ、葉が赤くなります。

では、赤や黄色のモミジを標本にした場合、色は

どうになってしまうのでしょうか。そこで、収蔵庫の中から、紅葉したモミジを探してみました。写真1はイロハモミジ、写真2はハウチワカエデですが、いずれもきれいな赤色が残っています。植物の葉は、一部の種類を除き、採取した後にすぐに押し葉にして乾燥させれば、このようにきれいな状態で標本にすることができるのです（写真3 例外：黒ずんだオシロイバナの標本）。

ところで、収蔵庫にはモミジの仲間の標本はたくさんありますが、紅葉しているものごとくわずかでした。つまり、標本のほとんどは春や夏に採取されたものなのです。紅葉の時期は植物が枯れ始める時期なので、植物調査があまり行われないうちか、そもそも標本数が少ないようですね。ただ、紅葉した標本を見れば、その年その地域でいつ頃紅葉していたのかがわかります。昔の標本と現在の紅葉時期を比較することで、紅葉時期がどのくらい変化したのかなど、面白い発見が得られるかもしれません。



写真1
紅葉したイロハモミジの標本



写真2
紅葉したハウチワカエデの標本



写真3
黒く変色したオシロイバナの標本

フィールドミュージアム事業の紹介

清和小学校教室博物館

地域連携課 齋木 健一

平成15年、旧君津市立三島小学校の一室に博物館が誕生しました。その後、小学校の移転統合などで、教室博物館は君津市立清和小学校に移転しました。普通の博物館と違って、ここにはきれいなパネルや立派な展示物はありません。中学校の理科準備室のような感じで、ケモノの骨や鳥の巣やヘビの脱け殻が無造作に置かれたりして、触ることもできます。



図1 清和小教室博物館のようす

教室博物館のスタッフは、齋木研究員（植物・理科教育）、樽研究員（昆虫）、黒田研究員（考古学）の3名で、開館は毎月第二、第四金曜日です。開館日には毎回、本館から面白い標本を持参するので小学校の子どもたちも楽しみにしてくれています。2月には、巨大古代ザメ、メガロドンの歯の化石を持参しました。黒板に貼ってあるのは、カラーコピーで実物大まで拡大したメガロドンの口です。

教室博物館では、地元である清和地区の方々とも協働して、様々な活動を行っています。夏休みには、子どもルームで自由研究の相談会を行いますし、秋



図2 黒板に貼ってある実物大のメガロドンの口

には文化祭に出展して、清和小学校の子どもたちと作った「清和小学校いきもの図鑑」の展示をしたりします。

目下の悩みは一般来館者が少ないことです。清和の豊かな自然を紹介できる、方策を考えていきたいと思っています。



図3 教室博物館開館中の表示

編集後記 再刊2号目の『中央博だより』。秋をテーマにお届けしました。資料や展示について、研究員一押しポイントが伝わったのではないかと思います。まだまだ、ご紹介できていないモノやコトがたくさんあります。それでは、次号を乞うご期待。

中央博物館だより No.75 令和7年9月発行

編集・発行 | 千葉県立中央博物館

本館 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 TEL 043-265-3111 FAX 043-266-2481
 分館海の博物館 〒299-5242 勝浦市吉尾 123 TEL 0470-76-1133 FAX 0470-76-1821
 大根分館 〒287-0816 香取市佐原ハ 4500 TEL 0478-56-0101 FAX 0478-56-1456
 大多喜城分館 〒298-0216 夷隅郡大多喜町大多喜 481 TEL 0470-82-3007 FAX 0470-82-4959
<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

